横芝の碑（その三十六）

―〈上町の如意輪観音〉―

横芝小学校方面から、役場横の踏切に差し掛ろうとしてすぐ左側を見ると、鉄道線路を背にした形で一つの祠が建っています。附近の人々はこの祠を、みょうれん様と呼んでいます。

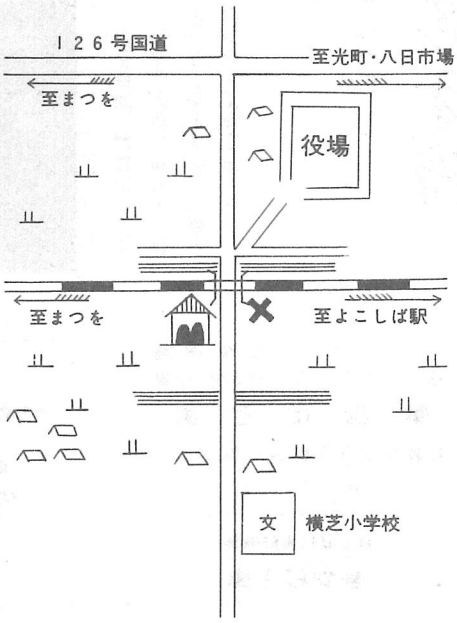
祠の中には、二体の石仏が安置されていて、傍には数本の塔婆が建っています。周囲の状況から、何んとなく鉄道事故で物故された人々の供養のためという気がします。しかし、塔婆ほ施主名を見ますと、本町第一善女、東町第二善女、上町善女等と総て女性ばかりであるのが妙に思われます。

これはその筈で、この祠は如意輪観音をお祀りしたもので、お産と厄払いの仏様として、近隣女性の信仰を集めているのだそうです。

話によりますと、この附近の既婚女性は毎年春秋の前、若くは、何処かで、お産がもとで亡くなった人や、また、犬の死産等があったりしますと、誰からともなく声を掛け合い、幾らかのお金やお米等を持ち寄って祠にお詣りをし、その後で、一緒にお茶を飲んだり食事をしたりしながら、死者の供養を行ない、また、お互いの安産や厄払い等を祈り合い、これからの安らぎを求める風習が、今でもあるのだそうです。特に犬が登場してくるのは、犬のお産がとても軽いので、これに肖るということからでしょう。

如意輪観音がお産と厄払いに何故結び付いたのかはよく詳りませんが、歴史大辞典の如意という項を見ますと、「骨角木竹にて手の形を作り、丈三尺許となし、脊等痒くして到らざる所を掻くこと意の如くなる故この語あり、講僧所持するものにして、柄に文字を記し、忽忘に備う」とあります。

また、如意輪観音のことについて広辞苑等には「観音菩薩が衆生化益のために変幻せる一つのお婆で、御造体は金色にして、蓮華上に坐し、如意宝珠（意の如く叶う珠）と法輪（仏の教えを解し到りつくせるを現す」を持ち多くのお姿は六臂を有す。中国では古くから崇拝されていたが、日本で造仏されたのは飛鳥時代からであるがそのお姿は種々である。地獄、餓鬼、阿修羅、人間、畜生、天上それぞれを斎度し、一切の願望を叶え、苦を救う。」とありますので困ったことが起きても、これによって救われる、ということや、畜生をも斎度する、ということ等に由来するかもしれません。みょうれん様と呼んでいるのは、恐らく如意輪様が転化したものと思います。

◎写真は祠の中の石仏で、六臂は有しておられませんが、膝を立てて肘枕のお姿は、二体共他でお見かけしている如意輪観音のお像と思われますが、右側の一体に亮讃童女、享保十四年己酉十月四日と刻まれ蓮華座の下には忌という慰霊文字が刻まれているところを見ますと生まれて間もなく迭失した嬰児の供養塔で、今から二八〇年余前の建立と思われます。左側の一体は、十九夜、上宿講中、〇〇〇年十一月吉日と刻まれています上宿というのは、役場周辺の昔の呼名で、○印は石が毀けていて年号の判読ができないのですが、恐らく左の石像よりは古いものと見てよいでしょう。十九夜という刻字については、十九という数は、昔から、特に女性には厄年として忌み嫌われていましたし、また、夜陰が女性の象徴とされていた慣習もありました。これは女性を陰に置く、ということより、女性の月々に起る体質の変化を、夜と月とに結び付けたものではないでしょうか。そうしたことから、十九夜の刻字は女性が時にはお産に繋がる月々の体質変化を、苦痛なく順調に経過し、また災厄を払い除くという悲願が秘められているものと思います。尚、この祠は、昭和三十八年頃信者の寄進によって約三万円で建立されたものだということです。（本稿取材に当り上町一小川千冬氏、同三武田いく氏の御協力を戴きました。）

（養護老人ホーム小沢所長寄稿）